

愛の無花果

華枝は結婚してからも生理の前になると必ず便秘になる。

実家の母からは、便秘の女は恥ずかしい、便秘の妻は旦那様に嫌われると言われ、常に浣腸で女の躰をされて育てられた。

結婚後、便秘した時は主人に知られないように、隠れて浣腸していたが、ある日、主人の圭介にその現場を見つかってしまい、華枝は夫の手で浣腸をされることとなってしまった。

プロローグ

初秋の風が吹き始め、周りの風景も色替りして落ち着いた季節になった。

華枝は主人に頼まれたお遣い物を求めに、広小路にある老舗の百貨店まで出かけた。

久しぶりのお出掛けに、どの着物にしようかと悩みながら、未だ出産経験のない細い和腰の身体に合わせて、薄青の泥大島を選び、紺地の名古屋帯を締めて外出の支度をした。

主人の仕事上のお遣い物なので、一応その意向は聞いてきたが、目当ての売り場ではあれこれと迷いもした。

結局、輪島塗りの赤漆大振菓子皿を選び、のし付きで包装してもらい持ち帰った。

華枝の主人近田圭介は、父親が心臓病で急死した後の会社を継いで、2代目の機械専門商社の社長になっている。

三十三歳になった華枝より八歳上の四十一歳、働き盛りである。

同居している姑の寿美子は健在で六十六歳、毎日お茶や踊りと忙しくして出かけている。

華枝はお見合いで結婚して十年、近田家の主婦として夫を支えて来たが、夫とは恋愛感情を持たずに結婚したので、恋愛結婚で見るとような対等な関係というよりも、結婚後の生活の中で見つけた嫁としての家族的な愛情で結ばれていて、その姿は夫に従う妻という古典的な専業主婦の姿である。その妻としての第一の役割は、子供を産み後継者を育てる事で、それは事業継続のためにも必須条件だが、姑にも夫にも期待されながら、未だに子には恵まれていない。

華枝は、夫に抱かれるたびに妊娠を期待するが、毎回その兆候は現れずに、夫に申し訳なく感じはじめている。

婦人科の診察

この歳になるまで、いつか自然に妊娠するだろうと、のんびり構え過ぎていたと思い、姑の寿美子とも相談して近くの産婦人科の医院を訪ね医師の診察を受けることにした。

今まで女として生まれて、幸いにまだ一度も婦人科的な診察を受けた事がなく不安だったが、もう妊娠迄の時間が限られているとの思いで受診を決めた。

婦人科の受診という事で、姑の寿美子に薦められてブラウスとスカートを着けて姑と二人で医院へ向かった。

受診の受付を済ませ、待合室に入ると5、6人の婦人や妊婦が診察を待っていて次々に呼ばれて入れ替わっている。

姑の寿美子は顔見知りの看護婦に挨拶して華枝を嫁として紹介した。

華枝は20分ほど待たされて名前を呼ばれ、看護婦が診察室に招き入れ、中年の男性医師の前の椅子を勧めた。

医師はこの医院の二代目の院長で、受診票を見ながら問診が始まった。

会話の中で先代の先生には、姑もお世話になっていたとの話だったので、ほっとして緊張も解け安心もした。

華枝は、結婚して十年経つが未だに妊娠しないことを話した。

医師は聞き終わると早速に華枝の病歴や生理期間や妊娠の経験、性交の回数など夫婦生活の一般的な内容を聞き、血圧を測り、胸の音を聞き、ブラウスを脱がせて、乳房の触診をして、カルテに書き込んでいる。

「特にお体に異常はない様です。夫婦生活も通常のようなので、まず内診して順次妊娠の可能性を調べていきましょう！」

内診台

華枝は、看護婦の指示でスカートを脱ぎ、下着も取って籠に入れ、高い診察台に乗った。

看護婦が何かと世話をしながら、

「奥さん、婦人科の診察は初めてですか？ この診察は女の宿命ですので、我慢してください！ 脚を大きく開いて、この台に足首を載せましょう！」

看護婦は華枝の股を開かせて両足診察台の足置きに乗せ、脚台を大きく広げた。

女の秘部を大きく開けられ、診察用の照明を当てられた華恵は、まるで満開の牡丹の花のように見える。

看護婦は華枝の下腹のあたりでカーテンを引き、医師の診察の準備をした。

「先生！ 用意出来ました、診察お願いします！」

華枝は、脚を大きく開けられて秘部を開帳した姿で診察を待っている。

これから何をされるのかとその恥ずかしさに汗が出てきたが、これはどの女も経験する女の宿命だと覚悟を決めた。

「これから診察します。少し違和感があると思いますが我慢してください。気を楽にして呼吸してね。」

医師はまず、診察台の横に周り、華枝の顔を見ながら腹部から診察を始め、両手で腹部を右回りに押さえながら、

「お通じはどうですか？ 便秘する事は有りますか？」

「はい、あります。お生理前などにお便秘することがあります。」

「ここは、痛いですか？ ではここは？ 何か感じますか？」

医師は、腹部を慎重に触診し、初診の患者の基本情報をカルテに記録するために陰毛の発育、会陰の状態、大小の陰唇の形状、肛門も視診した。

「これから内診します。緊張しないで、口呼吸で楽にしてください！ 今後の診察で内診は必ずありますから、そのつもりで！」

医師は、左手で華枝の陰唇を開き、右手の2指3指を膣に挿入し内診を始めた。

華枝は、陰唇を開かれた時に自分の秘密を見られたようで非常な羞恥を覚え、洗浄のための水が注がれた時は小さな呻き声を出してしまった。

「大丈夫ですよ！ もう少しですから！」

看護婦が横で医師に器具を渡しながら華枝に声をかけ勇気つける。

「もう少し我慢してください。今機械を入れますので、少し違和感があります」

医師は渡されたクスコを右手に持ち、左手で陰唇を開きながら、右手のクスコ鏡を45度の角度で膣口に挿入し、ゆっくり縦に回しながら子宮口まで入れ、底を確認してクスコを少し引きその先葉を大きく開いていった。

その時華枝は自分の中に冷たい空気が入って来たと感じた。

医師は子宮内の細胞を取り全体を確認してクスコを引いた。

「奥さん、もう終わりますよ！そのままいでてください！」

看護婦が局部に洗浄水を流し清拭し診察は終わった。

身支度をした華枝と寿美子は、医師に呼ばれて結果を聞いている。

「奥さん、今見たところ特に子宮の後屈とか糜爛などの異常は見られません。」

状態としては健康だと思えます。

現在妊娠しないのは、おそらくタイミングの結果だと思われれます。

もちろん、ご主人の検査もしてみないとその原因は分かりませんので、一度ご主人にも来ていただく必要があります。相談して、おいで下さい」

二人は今後の治療方針について説明を受けて、病院を後にした。

華枝は女としての一つの役割が終わったと思いい、その間の羞恥を今も感じながらもほっと息をつき、その結果に安心し帰宅した。

華枝の日常

夕飯の支度をした華枝は主人の帰りを待っている。

姑の寿美子は踊り仲間との温泉旅行に行き今夜はいない。

静かな部屋の中で、何するともなく、今日の婦人科での診察が思い出された。

医者とは言え初めて夫以外の男の前に脚を開き、陰部を開かれた事は、それが女の定めとしても、その羞恥ははかり知れない思いだった。

結婚した女にとって、寝室で夫に身体を開く事は妻の務めであり、夫婦の愛情の源になると信じている。

その時の恥ずかしさは今でも無くならないが、夫に全身を見られ、脚をも開かれて様々に愛される事は、夫の欲望が愛する妻にする行為だと思いい、嬉しくもあり愛しいくもあり、圭介の妻だと実感する時でもある。

主人が帰宅して風呂や晩酌、食事が終わると、もう十一時近くなる。

華枝はキッチンの片付けを終えて風呂に入り、浴衣の寝巻きに帯を前に締めて寝室に入る。

圭介は結婚以来毎夜華枝を抱かないと眠らない。

生理の時はさすがに抱かれないが、華枝が口で夫の欲求を満たすこともある。

日常の夫婦のコミュニケーションはこの夜の時間が中心で、これが夫婦生活なのだ、夫婦の日常生活に疑問を感じた事はない。

夫婦の寝室

「あなた！ 今日、婦人科の病院に行つて検査をしてきたのよ！」

「えっ！ なに！ 妊娠の検査か？！」

「いやだ！ 違いますよ！ お母さまと相談して一度婦人科の検査をしたほうが良いという事になったの！ なかなか妊娠しないので、あなたに申し訳なくて、私の身体に問題あるのか心配だったの！」

「そうだったのか！ それでどうなんだ？ 何かわかつたのか？」

「身体は別に異常は無いと言われましたわ！ ただタイミングの問題だろうって！ 今度もっと詳しく検査するので、ご主人も一緒に来てくださいつて言われたのよ！」

「そうか！ 大変だったな！ 私もか？ それじゃ時間を…？」

「私！ 本当に恥ずかしかつたわ！ 初めての婦人科のお医者様でしょう！ そこは、お母様もお世話になった医院なのよ！ でも、あなたにしか見せたことのない所を色々と診られたのよ！ もう、恥ずかしくつてどうしようかと思つたわ！」

華枝は、主人の愛撫を受けながら、今日の初めての婦人科検診の恥ずかしさを話した。

「そうか！ 恥ずかしかつたのか！ 華枝まだまだ処女のようなだね！」

圭介はその妻の可愛さに、強く抱きしめ接吻して妻の羞恥の経験を慰め、華枝もそれに応えて胸を押しつけて甘えている。

妻の診察の話に触発されたのか、夫は無言で妻をベッドに寝かせ浴衣の前をはだけ、下着を着けない妻の身体を眺めながら愛おしむように愛撫しはじめた。

華枝は、夫に触られる度に反応して羞恥を感じている。

それは、昼間の診察で医者に触られた所を、同じように夫に触られている恥ずかしさなのだ。

「あなた！ 私！ いや！ 恥ずかしわ！ そんな所… アツ見ないでください！ お医者様みたくて、アアツ、恥ずかしいッ！」

圭介は、華枝のいつもと違う反応に興味を覚えて、妻の身体の隅々まで執拗に広げて見て触り、口

をつけて味わうのだった。

無花果の謎

暑さも収まり秋の気配が色濃くなって、庭の楓も色付き始めた頃、華枝は時季が終わらないうちに果物のコンポートを煮ようと、果物屋から九州の皮が薄くて甘い無花果“豊蜜姫”を求めて帰った。

無花果を甘く煮たコンポートは圭介の好物で、六月の初物から秋の終わりまでは、食卓のデザートに切らした事がない。

今日は何かと家事が忙しかったが、午後になってようやく落ち着いてデザート作りが出来る。

無花果に優しく水をかけて洗った。何時もこの果実を見ると恥ずかしさが込み上げてくる。

果実の先から伸びる〰センチほどのへたの蔓が羞恥を感じさせる。

それは時々便秘で使うイチジク浣腸を思わせる。

きつとこの果実から名前を取ったのだろうといつも思っている。

その蔓を根本から切って煮る準備をした。

厚手の鍋に赤ワイン、シナモン、クローブ、ナツメグ、砂糖を入れ沸かし、無花果12個を鍋にそつと並べて入れた。

レモン汁、一片のバターを足して、赤ワインの煮汁をかけ回しながら10分ほど煮て出来上がった。

甘いワインとシナモンの香りがする。

ガラスの保存容器に入れて冷蔵庫にしまい、これにバニラアイスを飾ってデザートにしようと決めた。

主人の帰宅までまだ時間があつたので、前から気になっていた無花果の花言葉、主人との食卓の話題にしようと調べてみた。

植物の本を開くと、

“無花果は多産、豊かさ、豊満など膨よかな女性のイメージがあり、果実の先端の蔓を折ると、白い樹液が出てくるが、それは精液や母乳に例えられ、昔から女性的なエロスを感じさせる果実”であることを知った。

花言葉は成熟。その内容が興味を引き、栽培法を調べて見ると驚く事が書かれていた。

無花果の果実を早く熟成させるために、オイリングという方法を取るらしい。

木に生っている無花果のお尻の穴にシリンジを刺して、オリーブオイルを注入する、と説明があった。

華枝はその事を知って鳥肌が立つような感じがした。無花果も浣腸されて育つ事を知ったからだ。直ぐに母の姿が頭に浮かんだ。自分も成人するまで母に浣腸されながら成長してきた。

今、結婚してからも主人に浣腸されながら、妻として女として熟成されていると思うと、恥ずかしさが込み上げてきて、その羞恥に華枝の淫部はしどどに濡れて、パンティのクロッチを湿らせてしまった。

お浣腸のお願い

今夜、華枝は主人に浣腸してもらおう事になっている。

“四日もお便秘が続いている”と今朝主人の出勤前に、恥ずかしさをこらえて打ち明けたのだ。

五年ほど前の夏、五日も続いている便秘が苦しくて、憂鬱な気分が続いていたとき、姑の寿美子に身体の具合を聞かれてしまった。

「華枝さん！ 大丈夫？ 気分悪いの？ もしかして妊娠したのッ！」

義母は嫁が妊娠したのかと思ったようだった。

女同士話をするると姑も若い時から便秘の体質だと話し出して、自分が持っているイチジク浣腸を渡してくれた。

実家では母にお浣腸で便秘の躰をされ、結婚してからも自分で浣腸して通じをつけていた。

女にとって生理と便秘は仕方ないことだと思いつながら、寝室に入って浣腸しようと支度をしてい

ると、突然に主人が寝室に入ってきてしまった。

丁度その日は休日で、ゴルフの練習から帰ってきたらしい。

「華枝ッ！ どうしたんだ？ 具合悪いのか？ 浣腸なんかしてっ！」

「ああッ！ イヤッ！ 見ないでッ！ 恥ずかしいッ！」

浣腸の現場を見られてしまった華枝は、その恥ずかしさに慌てて、

「あなた！ ごめんなさいッ！ わたし、時々ひどいお便秘になるの。実家でも母にお浣腸されていたのよ。女はお便秘持ちが多いのよ！ 見られてしまっ！ お浣腸は… 女の秘密なのに…ッ！」

それからは隠さずと言うように約束させられ、その場で結婚後初めて夫の手で浣腸されてしまった。

その時の主人にされて浣腸は、母のお浣腸のとは全く別物で、羞恥と被虐の甘さを強く感じさせ、これまでとは違った強い愛情を夫に感じてしまった。

それ以来自分では手当出来ない便秘が続くと、主人に浣腸してもらうようになっていた。

夜、主人が帰宅してお風呂を済し、今日仕入れたの無花果の蘊蓄を披露して、楽しい食事を終え、最後に無花果のコンポートをデザートに出した。

「おお！ 好物のイチジクのコンポート！ 旨そうにできてるな！」

主人はスプーンでイチジクを二つに割り甘い果肉を食べている。

「そうだ華枝！ これからお前の便秘、浣腸するんだったな！」

このイチジク見て思い出したよ！」

「あなた！ そんなこと言っ！ 恥ずかしいわ！ 後で黙ってしてくださいね！ 今ここで言わなくなっ！ 本当にいじわる！ もう用意してあるわ…！」

華枝は食事の後片付けをしてお風呂に入り、寝化粧をして寝室に向かった。

これから主人に浣腸されると思うと、その恥ずかしさに華枝の陰唇は羞恥の女蜜で濡れ出ししている。

「あなた！ お待たせしてごめんなさいッ、お浣腸お願いします！」

「華枝！ 早くここへおいで！ お前を抱く前に、お腹の中を綺麗ににしてしまおうよ！ いいねッ！ 我慢だよ！」

「アンツ！ 恥ずかしいわ！ お浣腸であなたの前にお尻差し出すのって、恥ずかしくって仕方がないわ！ はい！ イチジク！」

華枝はベッドにうつ伏せに寝て枕を抱きしめながら、胴長の和尻を高く上げ、主人の浣腸を待っている。

主人は寝巻きをまくり上げて華枝の丸い尻を出し、イチジク浣腸を二つ取り出した。

「もつと脚を開いて！ お尻を上げなさい！ 股を開いてッ！ ほら！」

「ああンツ！ 恥ずかしい！ あなた！ そんなこと出来ません、あなたが開けてくださいッ！ そこッ！ あんまり見ないでッ！」

主人は華枝の尻の重なりを開けて、奥の赤茶に色付いた肛門を出した。

ワセリンを指に付け、華枝の肛門に丁寧に塗り込んだ。

「ああ！ あなた！ イヤッ！ ウン！ ああッ！ はやくーッ！」

主人は構わずにイチジク浣腸を濡光る肛門に差し入れ、その膨らみを潰して薬液を注腸した。

華枝はイチジクを深く差し込まれると、高尻の露わになった肛門に啞え、キュツと締めておとなしく注腸される。

二つ目を差し込まれた時は “あッ！” と鳴いた。

差し込まれたイチジクの下に見える、ぷつくりと膨れた陰唇からは愛液が滲み出る。

「あなた！ もうダメ！ お腹痛いわ！ 許して！ おトイレお願いッ！ あなたん…！」

浣腸の効き目が出てきたのか、華枝は尻を上下に動かして堪えている。

主人は肛門をティッシュで押さえて我慢させ、濡れた陰唇を分け、クリットを撫で華枝の反応を見た。

「あなた！ もう本当にだめ！ 本当にッ！ ああッ！ そこッ！ 弄っちゃだめッ！ イヤーッ！ いじわるッ！ お浣腸漏れちゃう！」

華枝の肛門はピクピクと慄いて便意の限界を知らせている。

主人は震える尻をピシャツ！と叩いて、

「さあ！ もう浣腸が効いたようだね！ トイレに行ってお腹を綺麗にしておいで！」

華枝はやつと解放され、股間にティッシュを挟み、腰を屈めながらトイレに向かった。

「あなた！ おトイレ覗いちや嫌ですよ！ 絶対来ないでね！ 見たら恥ずかしくって死んじやうから！」

主人の手から解放された華枝は、便器に座り肛門の緊張をようやく緩める事ができる。

「アアッ！ もうダメツ！」

ビュツ！ ビビツ！ ブウツ、ピーツ

大腸に溜まった沢山の便が、浣腸の刺激で蠕動が始まって便秘の便が押し出されう内側から肛門を押し開き、次第に太い宿便が顔を出した。

ミチミチと淫靡な音と共に、ニユルリと華枝の肛門から吐き出されてくる。

その音と臭氣に一層の羞恥を感じながらも、その排便の快感は華枝の陰唇をますます濡らす事になった。

「ああ！ お腹楽になったわ！ でも、ベッドに戻ったら主人にどんな顔をすればいいの？ 夫にお浣腸された妻なんて！ 恥ずかしくて！」

主人に排泄だけは見られたくなかった。それは最後の女の秘密だから。

華枝はベッドでの主人の顔色を心配しながら、洗面所の鏡で顔と髪を映し、薄化粧して寝室に戻って行った。

濡れに濡れて

「あなた！ 遅くなってごめんなさい。 あんな事していじめて！ お浣腸凄く恥ずかしかったの

よ！ 本当にイジワル！ エッチツ！ でも、おかげさまでお腹楽になりました！」

「そう！全部綺麗に出たの？ お前！ 浣腸で随分ここ濡らしてたね！ 嬉しかったの？ 浣腸が気持ちよかったのか？」

「そんなこと言って、またいじめる！ あそこ弄られた時、お浣腸ッ、本当に漏らしそうだったのよ！ あなたって本当にエッチッ！」

「お前がお尻にイチジク啜えた姿、とつても可愛かったよ！」

「ああ！ 恥ずかしい！ そんなに虐めないで！ もうはやくッ！抱いてください！」

華枝が排便しているの間、待たされていた圭介は、華枝を抱き寄せ乳房を掴み、両股を広げて陰唇の滴りを舐めとりはじめた。

「アアッ！ あなた！ いっぱい抱いて！ もうなんでもしてくださいッ！」

主人は華枝の両脚を担いで折敷いて、上を向いて開く濡れた妻の割れ目に男の怒張をぬるりと滑り込ませた。

妻は股を大きく開いてそれを啜え、夫の強く深い抽送に合わせて歓喜の鳴き声をあげ始めた。

「アアッ！ アンアンアン！ あなたッ！ あなたッ！ 大好き！ 愛してるッ！ イクッイク

ッ！ イクッッ！ あなたッ！ 一緒にッ！ 逝って…！ もうッ！ イクッッ」

夫の圭介にされた羞恥溢れる浣腸が夫婦の前戯になって、華枝は挿入と同時に喜悦の声を上げて鳴き出してしまった。

愛の浣腸とその後の寝室での愛の行為は、まだまだこれからも長く続きそうだ。

和尻 (W a j i r i)

日本の女性のお尻は、昔から和尻と言われている。その和尻にはイチジク浣腸がよく似合う。

和尻の重なりを開け、奥に隠されているおちよばな肛門にイチジク浣腸を差し込む時、イチジクの優しい曲線や肌色。ピンクと細い嘴が、着物が似合う胴長で少し下がった形の和風のお尻に淫靡に映えて、不思議な色気を醸し出す。

淑やかな日本女性の奥に隠れたスマイルの肛門にイチジク浣腸を啜えさせれば、それは一幅の日本画になる。

明治の昔から今日まで、日本の女性にとってイチジク浣腸は日常的に必要な便秘薬である。